

《第 534 回(2026 年 4 月 9 日) 子どもの本の読書会記録》参加者:9 人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

## 『消えたモナ・リザ』 ニコラス・デイ/作, 千葉 茂樹/訳 小学館

4月、『消えたモナ・リザ』を読みました。1911年にルーブル美術館で実際に起きたモナ・リザ事件を元にした作品です。レオナルド・ダ・ヴィンチの生い立ちと絵画「モナ・リザ」が生まれた背景、そして盗難事件の後に名画として有名になった理由を事件の経緯とともに解き明かします。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

\*\*\*\*\*

●フィクションではなく、本当の事件だったことに驚いた。これは100年前の出来事だが、盗難事件は現代でも起きている。ルーブル美術館の警備状況が気になった。再オープンした美術館で、人々が「モナ・リザ」が盗まれた犯行現場に殺到するシーンが印象的で、事件をきっかけに「モナ・リザ」に興味を示すようになった観客の心理や反応は今にも通じるところがあると感じた。

●「モナ・リザ」が盗まれたことは知っていた。場面展開が早く、読むのに苦労した。盗まれるまでは無名だった「モナ・リザ」が、後に名画として有名になるシンデレラストーリー。個人的には、事件と一緒に描かれたレオナルド・ダ・ヴィンチの生涯のほうが興味深く感じた。「モナ・リザ」の謎は、この絵のモデルであるリザ・ゲラルディーニのミステリアスさから生まれた要素がありそう。勢いで読めて、面白かった。

●事件の報道を実際に見ているようで、美術館や警察を批判するような気持ちが芽生えた。人は物事にドラマ性・面白さを求める。この事件で注目を集めた「モナ・リザ」は知識層だけでなく、一般層にも知られる作品になった。淡々とした文章で、面白く読んだ。イラストにユーモアがある。子どもが読むのに良い作品だと思う。

●事件・作者・絵画の背景が交互に描かれている。情報量が多く、中高生向け。最近ではルーブル美術館やイタリアの美術館で盗難事件が起きた。「モナ・リザ」が制作された当時の女性の生き方について知り、ジェンダー問題について考えさせられた。フランスとイタリアで事件への考え方が異なる点が興味深い。「モナ・リザ」が盗まれたのは、多

くの人に文字が急速に普及した頃で、色々な歴史の境目の時だったと感じた。

●場面の展開の早さ・横文字の名前が難しかった。人間の思い込みは落とし穴だと感じた。犯人がイタリアで英雄扱いされたことは、納得がいかなかった。盗まれなかったら名画になっていないのならば、名画の基準とは何なのだろうか。個人的には、レオナルド・ダ・ヴィンチとパブロ・ピカソの話に絞って書いてくれたら話が理解しやすいと思った。

●面白くて前半は一気に読んだが、日にちを空けて後半を読むとあの時の感動が消えていた。警察について、「何世紀にもわたって、犯罪の解決はパリ警視庁の仕事ではなかった。」という一文に驚いた。読み進めると、レオナルド・ダ・ヴィンチへの印象が変わり、意外と万能では無かったことを知れた。女性の名前が後世に残らないのは、平安時代の紫式部と同じだと感じた。

●ノンフィクションだが、自分のこととして読んだ。美術館の裏側を描いている。人には「良いものを自分で見つけたい」「自分の物を自分一人で所有したい」というような気持ちがある。人間の傲慢さ・素晴らしさについて考えさせてくれた。この本は子ども向けか大人向けかということは、はっきりと分けなくても良いと思った。

●「モナ・リザ」に起きた出来事に驚いた。レオナルド・ダ・ヴィンチへの印象が大きく変わった。リザ・ゲラルディーニは、はるか昔に消え去った後も絵の中で生き続けている。厳しい社会規範に縛られ、それを決して破ることのないリザを、ダ・ヴィンチは規範を破らせた姿で描いているというのが興味深い。作者の想像力によって書かれたノンフィクションだが、登場人物が生き生きと描かれていて面白かった。

次回 5月14日(木)10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

『ムーンレディの記憶』 E.L.カニグズバーグ/作, 金原 瑞人/訳 岩波書店

※申込み・参加費は不要です。